Osaka University Knowledge Archive

Title	メタフュシカ　第47号　彙報
Author(s)	
Citation	メタフュシカ. 2016, 47, p. 107-115
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/59484
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【彙報】

○　哲学哲学史・現代思想文化学

〔研究室について〕

現在、学部の哲学・思想文化学専修には 22 名が在籍している。大学院の哲学哲学史博士前期課程には 7 名、後期課程には 15 名が在籍しており、現代思想文化学博士前期課程には 6 名、後期課程には 8 名が在籍している。哲学哲学史の担当教員として、上野修教授、入江幸男教授、舟場保之准教授が、また現代思想文化学の担当教員として、須藤訓任教授、望月太郎教授（兼任）、中村征樹准教授（兼任）、藤田公二郎助教が、所属学生の教育に従事している。

本年度の講義・演習は以下の通りである。上野教授「可能とは何か」、「デカルトとスピノザ――ラカンの場合」、「スピノザ『エチカ』を読む XVII・XVIII」、「ドゥルーズを読む」、「出来事の存在論」。入江教授 “Discussing Kaplan’s ‘Demonstratives’”、「論理学初級（1）・（2）」、「あなたは相対主義者ですか」、「あなたは文化相対主義者ですか」。舟場准教授「カント『実践理性批判』を読む X・XI」、「カントの永遠平和論について」、「ドイツ哲学基本文献講読 I・II」、「J・ハーバーマスの思想 IX」。須藤教授「ニーチェの『ツァラトゥストラ』（5）」、「現代哲学史概説」、「ハイデガー研究（5）」。望月教授「発展途上国における教育開発のための哲学実践」（Chim PHORST 氏と共同）。中村准教授「現代科学を読み解く（3）」（江口太郎氏と共同）、“Writing Humanities Papers in English I”（和泉悠氏と共同）。そのほか、本研究室のリレー講義「西洋哲学通史（デカルトから現代まで）」が開講されており、また、例年通り、各教授ないし准教授ごとに、学位論文執筆のための演習が実施されている。

なお、非常勤講師の先生方の講義は以下の通りである。和泉悠氏（京都大学）“Writing Humanities Papers in English I, II”（I のみ中村准教授と共同）。江口太郎氏（大阪大学）「現代科学を読み解く（3）」（中村准教授と共同）、喜多千草氏（関西大学）「情報技術と戦争」、重田謙氏（長岡技術科学大学）「ウィトゲンシュタイン（『哲学探究』）における意味論と存在論」、野々村梓氏（大阪大学）「西洋哲学通史（デカルトから現代まで）」（リレー講義）、森田邦久氏（九州大学）「時間と空間の哲学：現代物理学の視点から」、Michel DALISSIER 氏（金沢大学）「哲学的方法論（Philosophical Methodology / Méthodologie philosophique）」、Luke MALIK 氏（大阪大学・外国人教員人件費支援事業哲学特任助教）“Readings in the Philosophy of Mind”、Chim PHORST 氏（王立プノンペン大学、カンボジア）「発展途上国における教育開発のための哲学実践」（望月教授と共同）。

研究室の成果発信として、本機関誌『メタフュシカ』（臨床哲学専門分野と共編）と欧文機関誌 *Philosophia OSAKA* を毎年刊行している。同欧文機関誌の前年度号には、当研究室から以下の論文が掲載された。上野教授 “Are the Real Distinction and the Substantial Union of Mind and Body in Descartes in Contradiction?”、舟場准教授 „Politik als ausübende Rechtslehre und Moral als theoretische Rechtslehre“。また、大阪大学文学会編『待兼山論叢』哲学篇を通じても、毎年、研究成果を発信している。同誌の前年度号には、当研究室から以下の論文が掲載された。阿部倫子（哲学哲学史博士後期課程）「可能的なモナドは存在しない？――ライプニッツにおける現実世界」、井西弘樹（現代思想文化学博士後期課程）「真理の「血肉化」としての笑い――ニーチェ『愉快な学』における「実験」思想」。なお、研究室公式ホームページ（http://www.let.osaka-u.ac.jp/philosophy）および YouTube 公式チャンネル videometaphysica1 を通じても、研究教育活動の関連情報を随時発信している。

研究室の活動基盤として、研究会 handai metaphysica を主催している。2016 年 3 月 3 日に第 19 回 handai metaphysica 研究例会を開き、本機関誌前年度号の合評会をおこなった。同年 7 月 1 日には第 20 回 handai metaphysica 特別講演会を開き、Benjamin SCHNIEDER 教授（ハンブルク大学、ドイツ）に講演 “Ground and Consequence” をしていただいた。同年 10 月 28 日には第 21 回同特別講演会を開き、Bożena GIERAT-BIERON 講師（クラクフ大学、ポーランド）に講演 “How the EU cultural policy is influencing the phenomenon of ‘European Identity’” をしていただいた（2015 年 11 月～ 2016 年 10 月の 1 年間に実施されたものを記載。以下同様）。

研究室の関連催事として、2015 年 11 月 21 日に、UNESCO「世界哲学の日」を受けて記念イベントを企画し、戸谷洋志（現代思想文化学博士後期課程）進行の下、哲学カフェ「かわいいとは何か？」を開いた。同年 12 月 22 日に、Kasem PHENPINANT 氏（チュラロンコン大学、タイ）に講演 “Amor Mundi: Arendt at Home in the World” をしていただいた。2016 年 4 月 14 日に、哲学・思想文化学専修新入生歓迎企画として、Alain-Marc RIEU 名誉教授（リヨン第三大学、フランス）に講演 “The Power of Thought” をしていただいた。

そのほか、院生主催の研究会が定期的に開催されている。2016 年 1 月 30 日に第 14 回哲学ワークショップが開かれ、以下の発表がおこなわれた。戸谷洋志「アウシュヴィッツ以降の神話――ハンス・ヨーナスを中心に」、岡田凛（哲学哲学史博士前期課程）「カントの実践哲学における道徳と幸福」、朱喜哲（哲学哲学史博士後期課程）／仲宗根勝仁（同）「ローティのネオ・プラグマティズムと現代英米圏の哲学の論点――表象主義・自然主義の観点から」。同年 3 月 12 日には、使用言語を英語にした研究会 Laboratory of Thinking 2016: The Third International Conference at Osaka University が開かれ、当研究室所属院生からは以下の発表がおこなわれた。八巻高之（哲学哲学史博士前期課程）“Examining the Frege-Geach problem”、樋口朋子（同）“Spinoza and Foundationalism”、立花達也（同）“Spinoza on Distinction and Composition”。

〔教員について〕

上野教授が、2015 年 12 月 20 日ドゥルーズ科研／脱構築研究会共催のワークショップ「ドゥルーズとデリダ」にて、セクション「精神／動物」に登壇した。2016 年 7 月 17 日大阪大学／チュラロンコン大学（タイ）共催の国際会議 Frontiers of Philosophical Investigation in Asia にて、前述論文“Are the Real Distinction and the Substantial Union of Mind and Body in Descartes in Contradiction?” を口頭発表した。同年 10 月 22 日・23 日開催の関西哲学会第 69 回大会にて、共同討議「現実性をめぐって――トマスとスピノザ」に登壇した。

入江教授が 2015 年度下半期にサバティカル休暇を取得した。2016 年 5 月 3 日にフローニンゲン大学（オランダ）で、12 日にはゲッティンゲン大学（ドイツ）で、講演 “Ethical Thoughts in Modern Japan Influenced by the West: In the Cases of Tetsurō Watsuji and Keiichirō Hirano” をおこなった。同月 30 日に共訳書ポール・ホーリッジ『真理』（勁草書房）を刊行した。同年 7 月 17 日開催の前述国際会議 Frontiers of Philosophical Investigation in Asia にて、口頭発表 “Are Deictic and Anaphoric Uses Distinguishable?” をおこなった。

舟場准教授が、2015 年 11 月 30 日に共編著書『現代カント研究 13 カントと現代哲学』（晃洋書房）を刊行した。同年 12 月 12 日～ 14 日に第 2 回大阪哲学ゼミナールを開催した。2016 年 9 月 7 日ゲーテ大学（ドイツ）開催の第 10 回日独倫理学コロキウムにて、口頭発表 „Solidarität und das substantialistische Verständnis der Volkssouveränität“ をおこなった。同月 28 日～ 30 日に、Marcus

WILLASCHEK 教授（ゲーテ大学、ドイツ）を招き、第 3 回大阪哲学ゼミナールを開催した。

須藤教授が 2016 年度上半期にサバティカル休暇を取得した。同年 9 月 17 日に第 13 回ニーチェ研究者の集いを開催した。同年 10 月 29 日開講の朝日カルチャーセンター中之島教室新設講座「ニーチェの生き、考えたこと」にて、第一回講義「芸術の形而上学か科学の実証精神か」をおこなった。

望月教授は、2014 年 4 月より、タイ王国バンコク都の大阪大学 ASEAN センターにセンター長として赴任している。同教授が、2016 年 3 月刊行の大阪大学全学教育推進機構編『大阪大学高等教育研究』第 4 号にて、共同調査報告「ASEAN 地域連携による高等教育の質保証とタイ王国のアクレディテーション・システム」を発表した。同年 6 月刊行のタイ日本学協会編 JSN Journal 第 6 巻第 1 号にて、共著論文 “Thai Students’ Preferences in Studying Abroad in Japan and the Japanese Government’s Policy on Accepting Foreign Students in Universities”（原文タイ語）を発表した。

中村准教授が、2015 年 11 月 28 日・29 日開催の日本生命倫理学会第 27 回年次大会にてシンポジウムに登壇し、口頭発表「責任ある研究活動の推進と人文社会科学系の研究倫理」をおこなった。同年 12 月 1 日～ 4 日開催の BMB2015（日本分子生物学会第 38 回年会と日本生化学会第 88 回大会の合同大会）にて研究フォーラムに登壇し、口頭発表「研究活動の不正行為への対応等に関するガイドライン（2014 年 8 月 26 日文部科学大臣決定）について」をおこなった。同月 10 日開催の安心信頼技術研究会「信頼研究の学際化」第 1 回ワークショップにて、口頭発表「研究公正における信頼の問題」をおこなった。同月 12 日・13 日開催の日本評価学会第 16 回全国大会にて共通論題セッションに登壇し、口頭発表「研究不正への対応と責任ある研究活動の推進――評価の観点から」をおこなった。2016 年 3 月 6 日開催の京都大学分野横断プラットフォーム構築企画シンポジウム「学際教育の原理」にて、口頭発表「学際教育の実践――大阪大学での実践事例」をおこなった。同年 4 月刊行の日本哲学会編『哲學』第 67 号にて、論文「研究不正問題をどう考えるか――研究公正と「責任」の問題」を発表した（この論文はその後、同年 5 月 14 日・15 日開催の日本哲学会第 75 回大会シンポジウムで口頭発表された）。同年 5 月 28 日・29 日開催の日本科学史学会第 63 回年会にて、口頭発表「長崎県池島炭坑と戦後日本の石炭政策」をおこなった。同年 7 月 10 日開催の日本学術会議若手アカデミー学術の未来検討分科会公開シンポジウムにて、口頭発表「技術と学問のあいだ――実学化と純化に揺れた革命期の学問」をおこなった。同月刊行の日本科学史学会編『科学史研究』第 55 巻にて、論文「科学者の社会的責任と科学者倫理――科学技術イノベーション政策の展開と研究不正問題」を発表した。同年 8 月 26 日開催の IDE 大学協会近畿支部 IDE セミナーにて、口頭発表「研究倫理教育をめぐる現状と展望」をおこなった。同年度下半期にサバティカル休暇を取得した。同年 10 月 1 日開催の日本倫理学会第 67 回大会にて、主題別討議「研究公正の最前線」に登壇し、口頭発表「研究不正再考――研究不正行為・好ましくない研究行為の類型学」をおこなった。そのほか、年間を通じて多数の大学で、研究倫理関係のファカルティ・ディベロップメント講演をおこなっており、さらには小中高等学校での普及講演や市民講座での一般講演も複数おこなっている。また、現在、日本学術会議若手アカデミー委員（特任連携会員）（2015 年 1 月～）、文部科学省公正な研究活動の推進に関する有識者会議委員（2015 年 4 月～）、一般財団法人公正研究推進協会理事（2016 年 4 月～）などを務めている。

藤田公二郎が 2016 年度より現代思想文化学の助教に着任した。同助教が、同年 6 月 3 日・4 日国立交通大学（台湾）開催の国際会議 Critical Theories and Local Societies: How do Philosophy,

Theories and Concepts Travel? にて、口頭発表 « Comment la philosophie de Foucault voyage-t-elle? » をおこなった。

〔学生について〕

生島弘子（現代思想文化学博士後期課程）が 2016 年 3 月、博士論文『哲学者は如何にして知を愛したか――後期ニーチェ思想における道徳・身体・知恵』により、博士号を取得した。

2015 年 11 月 7 日開催の表象文化論学会第 10 回研究発表集会にて、武田宙也（現代思想文化学・日本学術振興会特別研究員 PD）が、口頭発表「ライン・身ぶり・共同体――フェルナン・ドゥリニィと地図作成の思考」をおこなった（この発表はその後、2016 年 3 月刊行のあいだ哲学会編『あいだ／生成』第 6 号に掲載された）。2015 年 11 月 21 日・22 日開催の日本科学哲学会第 48 回大会にて、仲宗根勝仁が、口頭発表「認識的二次元主義の哲学的コミットメントの明示化」をおこなった。同年 12 月 12 日・13 日開講の藝術学舎（京都造形大学×東北芸術工科大学）公開講座にて、武田宙也が、集中講義「アートと社会」をおこなった。2016 年 1 月 5 日開催の岡山大学異分野融合研究「グローバル化時代の主権と境界についての基礎研究」の関連イベントにて、武田宙也が、講演「ミシェル・フーコー――生政治から生存の美学へ」をおこなった。同年 3 月 19 日開催の日仏哲学会 2016 年春期研究大会にて、樋口朋子が、口頭発表「スピノザ『エチカ』の論証について――第 1 部定理 19 備考は何を示しているか」をおこなった。また、武田宙也が大会シンポジウムに登壇し、口頭発表「『生存の美学』と〈生の形式〉――フーコーとアガンベンにおける他なる生の構想」をおこなった。同月刊行の日本倫理学会編『倫理学年報』第 65 集にて、戸谷洋志が、論文「人間像と責任――ハンス・ヨーナスにおける人間学」を発表した。同月刊行の神戸大学大学院人文学研究科編『21 世紀倫理創成研究』第 8 号にて、戸谷洋志が、論文「不確実な未来への責任――ヨーナスの「恐怖に基づく発見術」再考」を発表した。同年 4 月刊行の日独文化研究所編『文明と哲学』第 8 号にて、井西弘樹と谷山弘太（現代思想文化学博士後期課程）が、ロルフ・エルバーフェルト「多声的主観とニーチェの文化（Kulturen）概念」を翻訳した。同年 5 月 7 日・8 日開催の応用哲学会第 8 回大会にて、仲宗根勝仁が、ワークショップ「モンスターをめぐって――カプラン以降の意味論の展開」に参加し、口頭発表「直接指示論はモンスターと共存できるか」をおこなった。同月 14 日・15 日開催の国際会議 Philosophy and the Word: Graduate International Conference of Philosophy（国立台湾大学）にて、樋口朋子（哲学哲学史博士後期課程）が、口頭発表 “Spinoza and His Geometric Order” をおこなった。同じく 14 日・15 日開催の日本哲学会第 75 回大会にて、阿部倫子が、口頭発表「表出される世界のパースペクティヴ――ライプニッツにおける世界と知覚表象」をおこなった。また三輪秦之（哲学哲学史博士後期課程）が、口頭発表「カントにおける恒常性と自由の因果性」をおこなった。同年 6 月 11 日・12 日開催のアメリカ哲学フォーラム第 3 回大会にて、朱喜哲が、口頭発表「反表象主義による『表象』の回復――ネオ・プラグマティズム第三世代のローティからの継承と離反」をおこなった。同月刊行の関西哲学会編『アルケー』にて、谷山弘太が、論文「ニーチェ『曙光』における「習俗の倫理」の問題」を発表した。同年 7 月 17 日開催の前述国際会議 Frontiers of Philosophical Investigation in Asia（チュラロンコン大学）にて、立花達也（哲学哲学史博士後期課程）が、口頭発表 “Understanding Things as Necessary in Spinoza’s Theory of Affect” をおこなった。また仲宗根勝仁が、口頭発表 “Semantic Internalism and Individualism” をおこなった。同年 10 月 22 日・23 日開催の関西倫理学会第 69 回大会にて、阿部倫子が、口頭発表「ライプニッツにおける

モナドの表出作用と選択肢の熟考」をおこなった。

（藤田）

◯臨床哲学

〔研究室について〕

本年度、当研究室には、学部生が 25 名、大学院生が 28 名（前期課程 15 名、後期課程 13 名）在籍しており、そのうち 1 名が日本学術振興会特別研究員（DC）、3 名が未来共生イノバーター博士課程プログラム院生である。浜渦辰二教授、本間直樹准教授（兼任）、本年度着任した堀江剛教授、及びコースアシスタントの各スタッフが、哲学哲学史・現代思想文化学の教員と連携しつつ、教育・研究活動に従事している。

本年度の授業科目として、講義は、「わたしとマイノリティ」（本間・榎井）、「コミュニケーションの哲学」（堀江）、「ケアの臨床哲学――誕生の倫理とケア」（浜渦）が行われ、演習は、「対話技法論 I・II」（本間）、「臨床哲学フィールドワーク I・II」（本間）、「クリエイティヴ・ライティング入門」（本間）、「フェミニズム哲学を読む」（本間）、「外国語講読演習」（堀江）、「ケアの臨床哲学――誕生の倫理とケア」（浜渦）のほか、教員 3 人合同による論文作成指導演習として、学部生用「倫理学の研究方法 A ～ D」、院生用「臨床哲学研究 A ～ D」が行われた。学部生・院生のみならず社会人の参加も受け入れている「ひろば臨床哲学」（浜渦・堀江・本間）では、それぞれの関心に応じてグループに分かれ、そこで対話をする回と、全体で集まって問題を共有する回を作るとともに、ゲストスピーカーをお招きして話題提供いただき、それに基づいて対話を行った。また、2 学期に、非常勤講師としてマイケル・ギラン・ペキット氏に演習「Ethics in English」を担当していただいた。

哲学哲学史・現代思想文化学専門分野とともに、機関誌『メタフュシカ』第 46 号（2015 年 12 月）を刊行し、臨床哲学の院生 2 名の論文が掲載された。また、研究室の雑誌『臨床哲学』第 17 号（2016 年 3 月）、さらに第 18 号（同年 12 月）を web 上で刊行した。

臨床哲学研究室の企画として、2015 年 11 月 21 日に「第 38 回臨床哲学研究会」を開催し、横田恵子（神戸女学院大学文学部総合文化学科）「日本の HIV カウンセリングが内包する権力と政治性：1990 年代の公刊論文の分析を中心に」、服部佐和子（博士後期課程在籍、国立循環器病研究センター・医学倫理研究室 非常勤研究員）「自己生成のプロセスとしてのインフォームド・コンセント考える」、正置友子（博士後期課程）「幼い子どもたち（0 歳～ 3 歳）にとって、絵本とはなにか――メルロ＝ポンティとともに考える――」、村山晴香（博士後期課程）「ヴィゴツキーの思想からみたアクティブラーニング」というそれぞれの発表をもとに議論を行なった。本年度に入り、2016 年 7 月 30 日に「第 39 回臨床哲学研究会」を開催し、高原耕平（博士後期課程）「小さなもの」、大北全俊（東北大学大学院医学系研究科）「『うっかりの倫理』試論」、青木健太（大阪大学歯学部附属病院特任研究員・博士後期課程）「話すことと聞くことによる発見」、中川雅道（神戸大学附属中等教育学校）「ポスターの変化と成長の原理」というそれぞれの発表をもとに議論を行なった。

国際的な会議としては、2016 年 3 月 1 ～ 3 日に、待兼山会館会議室にて、臨床哲学研究室（代表：浜渦教授）のオーガナイズにより、ヘルシンキ大学・ユヴェスキュラ大学（フィンランド）から、サラ・ヘイナマー教授、イリーナ・ポレシュチュック講師、ジュシー・サーリネン、エリ

カ・ルオナコスキー、ペトラ・ニュマン＝サロネンの五人をお招きし、国内から、澤田哲生（富山大学人文学部准教授）、中真生（神戸大学人文学研究所准教授）、池田喬（明治大学文学部准教授）、稲原美苗（神戸大学人間発達環境学研究科准教授）、小手川正二郎（國學院大学文学部助教）、中澤瞳（日本大学通信教育部助教）、筒井晴香（東京大学総合文化研究科特任研究員）、藤高和輝（大阪大学人間科学研究科博士後期課程）をお招きし、本教室より、マイケル・ペキット（非常勤講師）、川崎唯史（博士後期課程）が参加・発表して、フィンランド・日本共同研究：国際シンポジウム「傷つきやすさと有限性の現象学」を開催した。また、2016 年 3 月 8 日に、待兼山会館会議室にて、ブッパタール大学（ドイツ）からお招きしたインガ・レーマー教授の記念講演会 “Genetic Phenomenology in Husserl's late Ethics”（司会：浜渦教授）を主催した。

ほかに講演会として、2016 年 3 月 15 日には、臨床哲学講演会「臨床現場からの創造：障がいや難病を生きる人たちと協働のものづくり」を開催した。水谷光（湘南工科大学工学部教授）氏に「福祉ものづくりの成果と課題」を、久住純司（ALS 技術ピアサポーター）氏に「ALS 患者の臨床現場と技術」を、田坂さつき（立正大学文学部教授）氏に「哲学科のものづくり」を、中岡成文（元大阪大学教授）氏に「臨床哲学からの創造」をお話しいただき、参加者とともに対話を行った。

〔教員について〕

浜渦教授は、自身が代表を務める「ケアの臨床哲学」研究会の主催するシンポジウムとして、「超高齢社会のなかで地域包括ケアを問い直す」（2015 年 8 月 30 日）、「超高齢社会のなかで難病支援を考える」（同年 11 月 1 日）、「超高齢社会のなかで男性介護を考える」（2016 年 3 月 5 日）、「超高齢社会のなかでケアのネットワークを考える」（2016 年 9 月 22 日）を、いずれも大阪大学中之島センターで行った。また、2015 年 8 月の調査に基づいて合同研究会「精神障害を持つ人が地域で暮らすのを支える：OKINAWA-ITALIA」（2015 年 10 月 25 日）を大阪大学中之島センターで行い、その成果として、『臨床哲学』第 17 号（2016 年 3 月）に共著「報告：精神障害をもつ人たちを地域で支える取り組み(2)沖縄訪問研修報告」を発表した。講演としては、「生老病死について」（第 2 回リビングウィル勉強会、2015 年 6 月 20 日）、「リビングウィルから地域での暮らし方を考える」（講演会・シンポジウム「あなたは最期をどのように暮らしたいですか？――在宅ホームホスピスとは――」、同年 7 月 4 日）、「地域で暮らし続けるとは」（第 1 回からほりケア CAFÉ、同年 9 月 12 日）、「いつかやって来る死のことを考えておきたい」（老い支度教室「エンディングノートを書こう」、同年 10 月 3 日）、「フッサール現象学と精神医学における対話」（阪大・臨床哲学研究室＆東大・UTCP 上廣共生哲学寄付研究部門合同ワークショップ「障害の哲学：理論とその応用」、同年 10 月 22 日）、「依存と自立の対立を超えて」（マイケアプラン研究会第 179 回 1 月定例会、2016 年 1 月 15 日）、「リビングウィルを法制化する必要があるのか？」（第 4 回リビングウィル研究会、同年 2 月 6 日）、「障がいをもちながら老いることと、老いるとともに障がいをもつことの間」（第 5 回リビングウィル勉強会、同年 4 月 17 日）、「植物状態になったら」（リビングウィル作成回、同年 6 月 4 日）、「セデーションについて知る、考える」（第 4 回リビングウィル作成会「がんになったら」、同年 9 月 3 日）、「こころの苦しみ～終末期鎮静を考える～」（姫路聖マリア病院緩和ケア病棟 20 周年企画「こころの時代の緩和ケア」、同年 10 月 29 日）、「看護ケアにおける臨床哲学的アプローチ」（甲南女子大学看護学科開設 10 周年記念講演、同年 11 月 26 日）、「老いと若さの対立を越えて」（第 48 回大阪大学公開講座、同年 12 月 9 日）、「ケ

アの臨床哲学〜生老病死の現場から〜」（椙山女学園創立 111 周年記念椙山フォーラム、同年 12 月 10 日）を行った。また、海外で外国語での発表としては、“Dialogue in Husserl's phenomenology and psychiatry”（interdisciplinary workshop DIALOGUE AND INTERSUBJECTIVITY, 2015.09.16, University of Helsinki, Finland）, “Intersubjectivity of Ageing – Reading Beauvoir's *The Coming of Age*”（Philosophical Seminar, 2015.09.18, University of Helsinki, Finland）, “Dialogue in Psychiatry and Person-centered Care”（Psychiatric Team for the Elderly in Borås, 2015.09.21, Borås, Sweden）, “Intersubjectivity of Person-centred Care: a phenomenological perspective”（2015.09.22, Centre for Person-Centred Care（GPCC）, University of Göteborg, Sweden）という発表を行った。ほかにも、上智大学グリーフケア研究所（大阪サテライト）人材養成講座で「臨床哲学」の講義を 2016 年前期 15 回で行った。また、自身が代表を務める科研費による共同研究「北欧の在宅・地域ケアに繋がる生活世界アプローチの思想的基盤の解明」の成果を報告するため、2016 年 2 月 20 日に大阪大学中之島センターにて、公開ラウンドテーブル「北欧ケアの思想的基盤を掘り起こす」を開催した。同じく科研費による共同研究「北欧現象学者との共同研究に基づく傷つきやすさと有限性の現象学」が 2016 年 4 月より 3 年間の予定で始まり、第 1 回の研究会を 2016 年 7 月 18 日に待兼山会館会議室にて、第 2 回研究会を同年 12 月 23 日に明治大学駿河台校舎にて開催した。論文としては、『グリーフケア』第 4 号（2016 年 3 月）に「グリーフケアのために――臨床哲学からのアプローチ」が、『臨床哲学』第 17 号（2016 年 3 月）に “Intersubjectivity of Ageing – Reading Beauvoir's *The Coming of Age* –” が掲載された。また、山口一郎氏（東洋大学教授）との共訳『フッサール　間主観性の現象学 III』（筑摩書房、2015 年 10 月）により三巻本が完結し、それについて島田喜行氏（同志社大学）による書評が『現象学年報』第 32 号（2016 年 11 月）に掲載された。

堀江剛教授は、科研「被災地における『哲学的対話実践』の理論的基礎付けと展開」第 2 回研究会（2016 年 6 月 11 日､大阪大学）にて「組織における『対話』の位置づけ」を発表した。また、日本生命倫理学会第 28 回年次大会（2016 年 12 月 3-4 日、大阪大学吹田キャンパス）公募ワークショップ「臨床倫理の委員会活動に現れる病院『組織』の問題」において報告を行った。論文では『待兼山論叢』第 50 号（哲学篇）において「倫理と組織：社会システム理論から見た倫理の可能性」を発表した。

〔学生について〕

2016 年 3 月、服部佐和子（博士後期課程）が、「自己における関係の断絶とその再生」という題目で博士（文学）の学位を取得し、フランツィスカ・カッシュ（博士後期課程）が、“The Paradigm Shift in Obesity Research and Its Ethical and Cultural Implications” で博士（学術）の学位を取得した。

服部佐和子（博士後期課程）は、『臨床哲学』第 17 号（2016 年 3 月）に共著「自己生成のプロセスにおけるインフォームド・コンセント」が掲載された。

鈴木径一郎（博士後期課程）は、『メタフュシカ』No.46（2015 年 12 月）に論文「労働における観想的契機について――初期ヴェイユの時代批判から」が掲載された。

山口弘多郎（博士後期課程）は、『待兼山論叢』第 49 号（2015 年 12 月）に「フッサールとアヴェナリウス－生活世界の起源について」が掲載され、日本現象学会第 38 回研究大会（2016 年 11 月 27 日、高千穂大学）にて「フッサールにおける接頭辞「原（Ur-)」の射程――「原創設」概念を手掛かりに」という発表を行った。

正置友子（博士後期課程）は、絵本学会第 19 回大会（2016 年 5 月 29 日、京都女子大学）にて、「『もこ　もこもこ』――ひとには、生れてきて「うれしい」という存在の時期がある――」、日本乳幼児教育学会　第 26 回大会（2016 年 11 月 27 日、神戸女子大学）にて「絵本における「めくる」という機能から生れるナラティヴ――「生」の時の流れをつかむ――」という発表を行った。

前原なおみ（博士後期課程）は、『臨床哲学』第 17 号（2016 年 3 月）に研究ノート「老衰死の看取り体験から老いの課題を考える――ボーヴォワールの『老い』を手掛かりとして」が掲載された。

永浜明子（博士後期課程）は、第 62 回学校保健学会（2015 年 11 月、岡山コンベンションセンター）にて「「傍観」という行為の意味とその要因」、第 63 回学校保健学会（2016 年 11 月、筑波大学）にて「傍観における他者の視線」という発表を行い、『日本教育保健学会年報』第 23 号（2016 年 3 月）に共著論文「広汎性発達障がいのある学生の大学生活における困りに関する当事者研究」、『臨床哲学』第 17 号（2016 年 3 月）に報告「後進・挑戦・躍動」（前述「精神障害をもつ人たちを地域で支える取り組み（2）沖縄訪問研修報告」所収）が掲載された。

川崎唯史（博士後期課程・日本学術振興会特別研究員 DC）は、ワークショップ「他者と倫理」（2016 年 3 月 10 日）にて「Carrying a “Great Phantom”: Merleau-Ponty on Role-playing」、レヴィナス研究会特別大会（2016 年 8 月 6 日、岡山大学）にて「レヴィナスとケアの倫理の接点を探る：寄与に向けて」、第 14 回レヴィナス研究会関西班例会（2016 年 11 月 12 日、同志社大学）にて「セザンヌの自由――メルロ＝ポンティの道徳論に向けて」という発表を行い、『メタフュシカ』No.46（2015 年 12 月）に論文「メルロ＝ポンティにおける社会的な生の優位」、『メルロ＝ポンティ研究』第 20 号（メルロ＝ポンティ・サークル、2016 年 9 月）に論文「英雄と逃走 メルロ＝ポンティにおける二つの自由」、『現象学年報』第 32 号（日本現象学会、2016 年 11 月）に翻訳「感情移入と承認」（ヨーナ・タイパレ著）が掲載された。

日高悠登（博士後期課程）は、心の先端研究ユニット年次総会・ポスター研究交流会（2016 年 2 月 14 日、京都大学）にて「チャプレンへのインタビュー　――きぼうのいえを例に――」、日本宗教学会第 75 回学術大会（2016 年 9 月 11 日、早稲田大学）にて「死生から再考する医療文化」という発表を行い、論文「再考する宗教者像」が『宗教研究』89 巻別冊第 74 回学術大会紀要号（日本宗教学会、2016 年 3 月発行）に、論文「狭間のケア提供者――チャプレンとビハーラ僧の存在に着目して」が『宗教と社会貢献』第 6 巻 1 号（「宗教と社会貢献」研究会、2016 年 4 月発行）に掲載された。

青木健太（歯学部附属病院特任研究員・博士後期課程）は、大阪大学未来知創造プログラム（2014 年度）採択課題「歯科医療現場における障害のある子どもとその親への包括的支援プログラムの開発」講演会および研究活動報告会「障害者歯科の家族支援は必要か？」（2016 年 2 月 11 日、大阪大学中之島センター）にて発表「障害者歯科医療現場での親への心的支援」を、関西障害者臨床研究会第 8 回研究集会（2016 年 7 月 17 日、ピアザ淡海）にて稲原美苗さんと共同で教育講演「障害者歯科医療における家族支援――哲学対話をとおして見える世界」を、第 33 回日本障害者歯科学会総会および学術大会（2016 年 9 月 30 日～ 10 月 2 日、ソニックシティ）にてポスター発表「親の支援を目指す障害者歯科への哲学対話の寄与」を行った。

高原耕平（博士後期課程）は、『臨床哲学』第 17 号（2016 年 3 月）に浜渦教授との共訳「老いの変容 : 自己性、標準性、時間」（サラ・ヘイナマー）が掲載され、応用哲学会第 8 回年次研

究大会（2016 年 5 月 8 日、慶應義塾大学三田キャンパス）にて「災いを哲学してゆくこと」、第 39 回臨床哲学研究会（2016 年 07 月 30 日、大阪大学豊中キャンパス）にて「小さなもの」、日本質的心理学会第 13 回大会（2016 年 09 月 24 日、名古屋市立大学）にて「災害復興過程をめぐる人文学的アプローチの再検討――地震学者との対話を通じて――」、日本災害復興学会 2016 石巻大会（2016 年 10 月 1 日、石巻専修大学）にて「災害復興再考：「現場」という概念に注目した人文学的アプローチの挑戦」という発表を行い、朝日新聞 WEBRONZA に「『心のケア』への違和感――熊本地震をめぐって：被災者の虚無感に付き添うということ」（2016 年 04 月 26 日）、「自衛隊は隊員のメンタルヘルス対策を進めるべきか［1］海外派遣隊員『自殺者 56 名』の背景」（2016 年 05 月 31 日）、「自衛隊は隊員のメンタルヘルス対策を進めるべきか［2］隊員への『心のケア』が抱える危うさ」（2016 年 06 月 02 日）、「自衛隊は隊員のメンタルヘルス対策を進めるべきか［3］ベトナム戦争から生まれた PTSD」（2016 年 06 月 07 日）、「『シン・ゴジラ』が描く 3・11 後の戦慄（上・下）」（2016 年 08 月 09 日）、「ツイッター翻訳小説『ニンジャスレイヤー』の挑戦（上・下）」（2016 年 12 月初旬）が掲載され、朝日新聞朝刊全国版（2016 年 08 月 30 日付）で「『シン・ゴジラが』が描く 3・11 後の戦慄」が紹介された。

松本渚（博士前期課程）は、広島比較文化研究会（2016 年 11 月 6 日、広島市まちづくり市民交流プラザ）にて「被爆証言の歴史と変容」という発表を行った。

（浜渦）